



—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

シリア：新たな化学兵器使用疑惑

シリアでの化学兵器使用疑惑に関する国連調査団が、8月18日にダマスカスに到着した直後、新たな化学兵器使用疑惑が生まれた。シリア反体制派は、8月21日、シリア政府軍がダマスカス南郊のグータで化学兵器を使用したと主張した。映像などがインターネットに掲載され、国際社会の懸念が増大した。在英の反体制派組織であるシリア人権監視機構は、21日、化学兵器で136人が死亡したと発表した。反体制派側には、死者は1360人になったとの主張もある。国連安保理は、同日、緊急の非公開会合を開催し、シリアでの化学兵器使用疑惑を協議したが、ロシアと中国の反対があり、安保理の意見とまとめることができなかった。国連は、ダマスカスにいる化学兵器使用疑惑調査団が、新たな疑惑の現場を調査することをシリア側に要求した。化学兵器の使用を否定しているシリア政府は、24日、反体制派のトンネル内で化学物資を発見したと主張していたが、25日、国連調査団が現地調査を行うことに同意した。

24日には国境なき医師団が、協力関係にあるダマスカスの3つの病院に21日朝、神経毒性の症状を訴える患者約3600人が搬送され、355人が死亡したと発表した。同医師団は、症状の原因は確認できないとした。英国、仏国は、シリア政府軍が化学兵器を使用した疑いが強いとした。米国のオバマ大統領は、24日にホワイトハウスの国家安全保障会議(NSC)を開き、シリア情勢への対応策を検討している。25日、米国政府筋は、シリアが化学兵器を使用したことを疑う余地はないとして、オバマ大統領の設定したレッドラインをシリアは超えたと述べたと報道されている。ロシアは、シリア政府が化学兵器を使用したとの見方に疑問を呈する立場を維持している。

報道では、国連調査団は、26日にも現場を調査する予定である。英国は、調査は遅すぎて、証拠は破壊されていると批判している。

## 評価

シリアでの化学兵器使用疑惑については、事実関係の確認があいまいなまま疑惑だけが大きく取り扱われてきた。今回も、状況確認より先に、疑惑の強さや疑惑が事実であった場合の対応策をめぐる報道が多い。疑いはあるとしても、化学兵器の使用の確認がどのように行われるかを注視する必要があるだろう。当面は、最も客観的な事実関係を判定できる可能性のある国連調査団が、どのような調査をするかが焦点かもしれない。

(中島主席研究員)